

短期海外研修における日本人学生のソーシャル・ スキルに関する調査的研究

田中 共子*・神山 貴弥**・藤原 武弘**

*広島大学留学生センター・**広島大学総合科学部人間行動研究講座
(1991年10月31日受理)

A study on the social skill of Japanese students in short term oversea language seminar

Tomoko TANAKA, Takaya KOHYAMA and Takehiro FUJIHARA

Abstract

In this survey, we discussed about a psychological effect of cross-cultural experiences during a 5 weeks summer language training seminar for college students in the U.S.A. (N=26) or U.K. (N=31). We investigated about 1) social skill, 2) image of both countries' and Japanese people, 3) English language ability and 4) knowledge and interest about the countries. They observed more skills related to initiate a contact, and less skills related to assert and joke. The results reflected a difficult skills for Japanese students. Language ability and other individual factors related to some skills positively. American or English people's image positively changed after the tour. Image of Japanese people change better or worse. Some skills' performance affected to image change.

異文化体験についての心理学的研究には、異文化圏への移民や駐在員、留学生などの長期滞在者を対象にしたものが多く、旅行や出張などの短期滞在者に関しては研究が少ない(Furnham & Bochner, 1986)。しかし世界中の経済的な発達に伴い、観光や研修のための旅行はかなり機会の多い異文化接触の形態となってきた。こうした短期間の異文化体験者は、異文化接触の心理的影響の研究にとっても無視できない数に達している。

では彼らの海外体験は、心理的に何をもちたらし、そしてそれは何によって規定されるのであろうか。Pearce (1982) は、英国からのモロッコやギリシアへ行った旅行者について調査し、彼らが旅行前のホスト国民への先入観的な思い込みや自分達自身への認識を改めることができたと報告している。山本ら (1985) も、旅行後の訪問国のイメージの好転を報告している。Steinkalk & Taft (1979) は、外国旅行は自文化への洞察をもたらすが、自文化への新しい評価が歓迎できない場合は落ち込むこともあると指摘した。Furnham (1984) は、旅行は楽しさなどの肯定的感情と共に、時には怒りやいとわしさ、退屈などの否定的な感情も生じさせると述べた。すなわち短期であれ、異文化体験によって肯定的あるいは否定的な認知的・感情的な変化が起きる。

こうした異文化接触によって生じる変化のうち、初期の否定的な感情の生起や心理的混乱をカルチャーショック (Oberg, 1960) と呼ぶが、その後ダイナミックなプロセスを経てその混乱

が収束され適応に至るといわれている (Kim, 1986)。Pearce (1981) は、長期滞在者のみならず旅行者の心身の変化についてもこのカルチャーショックと回復のプロセスが見いだされると報告した。彼は旅行者に、旅行中の毎日の気分と健康状態について日記をつけさせ、旅行初期の数日間はネガティブな気分や健康面の不調がみられたが、ある者はその状態を早く乗り越え、そしてある者はそうした変化が遅かったと報告した。すなわち、旅行も広く異文化接触のひとつの形態としてとらえ、異文化適応の視点でその体験を探る必要があると思われる。

Furnham & Bochner (1986) は、旅行者の異文化体験の特徴を、①比較的短期間のためカルチャーショックの初期のプロセスである「興奮の」フェーズしか経験し得ない、②バックツアーでは計画・管理された環境下であるうえ、添乗員という仲介者がいて現地の人と直接の接触が限られ、③ツアー仲間が常にソーシャル・サポート・ネットワークとなり、④新しい環境に関与するというより「観察者」であることなどのため、葛藤や問題が生じにくく、カルチャーショックが質量ともに軽微だと述べている。本研究において調査対象者とした短期海外研修者に関しては、ホームステイや語学研修を行うために、②と④の傾向は薄まり、ホスト国の人との直接の関わりによる葛藤などがより体験しうると期待される。また今回の滞在期間は5週間であるが、異文化適応のペースには個人差があることを考えれば、この間にカルチャーショックや異文化適応をどこまで体験できるかは体験者によるであろう。

カルチャーショックを乗り越えて異文化適応を速やかに進行させる資質・能力については、さまざまな知見があるが、その中で異文化適応のソーシャル・スキルモデルといわれるものは、当該文化での社会行動にまつわる様式を認知的にも行動的にも会得することによって適応的行動がとれるとした、行動の学習を重視した考え方である (Furnham & Bochner, 1986)。すなわち、適応に関する個人側の要因として、相手社会において必要なスキルを考え、それが実行できれば効果的に人と関わることができ、速やかに異文化にとけこめると考える。原と稲田 (1991) は、国際社会において適応力や有能性を発揮する国際的資質は、認知面もさることながら特定の状況下で実際に効果的な行動がとれるかどうかといった行動能力に収められると述べている。すなわち特定の異文化の特定の状況で、実際に効果的な行動を知っていて、それを実行したかを問われ、それが異文化との関わりを決定して行く要因になると考えられる。

これまでのところ海外短期滞在に関する心理的影響は、国際意識などおもに認知面、あるいは不安などの感情面について調べられてきた。しかしながら行動面については、異文化接触の質を規定する要因の一つであるにもかかわらず、あまり調べられていない。本研究では、短期海外研修の日本人学生を対象に、異文化体験における行動面に注目し、現地の人との接触の程度を規定する要因としてソーシャル・スキルをとりあげ、さらに自地の国民のイメージや健康の変化との関係を調べ、異文化接触の心理的变化を多元的にとらえてみたい。そのためまず、①訪問先で必要なソーシャル・スキンの実施度を測定した。さらに、②スキルの実施度と、スキルの実施度を規定すると思われる語学力や相手国への関心などの要因との関係を検討した。また実施の程度がもたらす心理的影響について、③相手国民や日本人のイメージなどが、スキルの実施の程度によってどう変化するかも検討した。

方 法

調査対象者 O大学およびO短期大学の学生で、1990年夏期に行われた大学主催の短期海外研修に参加した者57名。研修は5週間にわたり語学研修、ドミトリー滞在、ホームステイ、旅行を行うものであった。英国研修31名 (男2, 女29)、米国研修26名 (男2, 女24)。

表1 研修前質問紙の構成

1. 名前	2. 年齢	3. 性別	①男 ②女	4. 専攻
5. 海外渡航経験	①あり ②なし			
6. 外国人の親しい友人・知人	①あり ②なし			
7. これまでのアメリカ/イギリスへの関心	①かなり強かった ②やや強かった ③やや弱かった ④かなり弱かった			
8. 自分のアメリカ/イギリスへの知識(歴史, 地理, 習慣等)を普通の人と比べると	①かなり多いと思う ②やや多いと思う ③やや少ないと思う ④かなり少ないと思う			
9. 英語力	①上級(大学の授業が全部英語で行われてもついていける) ②中級(日常会話程度) ③初級(日常会話にも困難がある)			
10. 内外向	①内向 ②外向			
11. 最近の健康状態:	(1)睡眠の乱れ (2)食欲不振 (3)体のだるさ・疲れ易さ (4)胃腸の不調 (5)喉や鼻の不調 (6)皮膚のトラブル (7)歯の痛み (8)いらいら・かっとなりやすさ (9)意欲の減退 (10)気分の落ち込み (11)不安 ①ある ②ない			
12. アメリカ人/イギリス人, 日本人に対するイメージ	(図1-4参照)			

表2 研修後質問紙の構成

1. 名前
2. 研修中の感想:
ドミトリーの (1)食事 (2)部屋や施設 (3)アメリカ人と交流 ①よかった ②ふつう ③よくなかった
ホームステイ先の (1)もてなし方 (2)食事 (3)部屋 (4)家族や知人との交流 ①よかった ②ふつう ③よくなかった, など3段階評価
旅行中の (1)スケジュール (2)気候 (3)食事 (4)宿泊施設 (5)盗難 (6)出費 ①よかった ②よくなかった, など2段階評価
全体の (1)交通手段 (2)日本人仲間との関係 ①うまくいった ②普通 ③問題があった, など3段階評価
3. アメリカ/イギリスでの健康状態 (研修前の項目に ⑫ホームシック を加えたもの)
4. アメリカ人/イギリス人, 日本人に対するイメージ (研修前と同じ)
5. ソーシャル・スキル (表3参照) アメリカ人/イギリス人に対し, あげたような行動をどのくらいしたか。 ①よくした ②ときどきした ③あまりしなかった ④まったくしなかった

調査内容 1) 研修前質問紙 (詳細は表1を参照) ①自己評価による個人に関する情報 海外渡航経験の有無, 外国人の友人の有無, 相手国への関心, 相手国への知識, 英語力(上・中・初級), 内向・外向。②健康状態 CMI (Cornel Medical Index) を参考に睡眠, 食欲, 疲労, 胃腸, 呼吸器, 皮膚, 歯, 怒り, 無気力, 抑うつ, 不安の11領域を設定しその異常の有無をチェックさせた。③相手国民および自国民のイメージ 吉田 (1981) を参考に選択した, 陰気な一陽気な, など計25項目の形容詞対に対して, SD法による7段階で評定させた。

2) 研修後質問紙 (詳細は表2を参照) ①研修中の感想 ドミトリー, ホームステイ先, 旅行中, 研修全体についての快適さ, 満足度などを3件法あるいは2件法で評定させた。②健康状態 研修前の項目に加えホームシックの有無をチェックさせた。③相手国民および自国民へのイメージ 研修前と同様のもの。④ソーシャル・スキルの実施状況 ソーシャル・スキルは, 米国における英語を用いたコミュニケーションで必要になるスキルについて述べられた田中 (1991) の資料から, 研修中実施の機会があると思われる83項目を設定し, 実際に研修先でどの程度実施したのかを4段階で評定させた。これらの項目は13領域にわかれており, 各々の領域で実施するのが比較的易しいものから困難なものまでが3-10項目にわたって列挙されていた。

調査方法 研修前質問紙は, 行きの飛行機の中で一斉に実施された。また研修後の質問紙は,

研修から帰国後に郵送法によって個別に実施された。

結 果

1. ソーシャル・スキルの実施度

まず各スキルが、行き先別にそれぞれどの程度実施されたのかについて検討した。英米の行き先別に、各スキルの実施度の平均値とその標準偏差を示したのが表3である。実施度の平均が3.00以上の項目は、米国行きで14項目、英国行きで11項目あり、これらは実施度が高かったスキルといえる。これらのうち、人と会話を始めるときの「目をあわせる」、「ハロー・ハイなどという」、「にっこり笑う」、「相手について何か尋ねる」、「ちょっとした話題でおしゃべりする」といったスキルや、言葉のハンディーを持ちながら話そうとするときの「繰り返してくれるように頼む」、「分からなかった言葉を説明してくれるように頼む」といったスキルや、友達をつくろうと思ったときの「挨拶し合う関係になる」、「おしゃべりをする関係になる」といったスキルなどが、両国を通じて実施度が高かった。本研究では短期研修を経験した学生を調査対象者としたことを考慮すれば、これらのスキルは異文化へ移行後の初期段階で実施されるスキルと考えられる。

一方、スキルの実施度の平均が2.00未満の項目は、米国行きで27項目、英国行きで25項目あり、これらは実施度が低かったスキルといえる。これらのうち、異性の友人をつくるときの「コーヒーに誘う」、「どこかに出かけてデートする」、「行きすぎた関係にはノーという」などの計7項目のスキルや、各種の冗談をいうときの「バカげた非現実的な冗談をいう」など計3項目のスキルや、失敗したときの「相手に対して不満をいう」など計2項目のスキル、学校で積極的に学ぶときの「教師に授業の工夫や変更などを要求する」など計2項目のスキルなどが、両国を通じて実施度が低かった。これらのスキルは、上記に示したスキルとは反対に、異文化体験をしたときに初期段階では実施されにくいスキル、あるいは日本人学生が苦手なスキルであると考えられる。今回の調査では、行き先が同じ西洋文化圏ということもあり、実施度の高かった項目や低かった項目に米国と英国の間で大きな違いはみられなかった。

2. ソーシャル・スキルの実施度と個人変数との関係

スキルの実施度と個人の相手国に対する関心度や知識度、あるいは英語力との間の関係を検討するために、行き先別にこれらの間の相関係数を算出した。なお、スキルに関しては、領域ごとの実施度（各領域に属する項目の合計点）とスキル全体の実施度を算出し、これらすべてについて検討した。

表4には米国行き、表5には英国行きの結果が示されている。表4からも明らかなように、米国行きでは、米国に対する関心度が高いほど、スピーチに関するスキル・冗談に関するスキルの実施度・積極的な学習のスキルが高いことが示された。また米国に対する知識度が高いほど、頼み事に関するスキル・冗談に関するスキル・積極的な学習のスキルの実施度が高く、また英語力が高いほど、頼み事に関するスキルの実施度が高いことも示された。

一方、英国行きに関しては表5に示されるように、英国に対する関心度が高いほど、交渉に関するスキル・会話に関するスキル・友達に関するスキル・パーティーに関するスキル・公平なつきあいに関するスキルの実施度、およびスキル全体の実施度が高いことが示唆された。また、英国に対する知識度が高いほど、交渉に関するスキルの実施度が高いこと、さらに英語力が高いほど、言葉のハンディーの克服に関するスキル・冗談に関するスキルの実施度が高いこと

表3 ソーシャル・スキルの実施度

スキル項目	米国行き M(SD)	英国行き M(SD)
(1) 言葉のハンディーを持ちながら話そうとするとき		
a. 英語が十分できない事を説明する	2.19(0.90)	2.56(1.02)
b. ゆっくり話してほしいと頼む	2.23(0.91)	2.58(0.96)
c. 繰り返してくれるように頼む	3.38(0.64)	3.52(0.68)
d. 分からなかった言葉を説明してくれるように頼む	3.19(0.90)	3.22(0.67)
e. 自分が理解したと思う内容を繰り返して確認をとる	2.50(0.86)	2.74(0.77)
f. 自分の英語力以外に、会話を阻害する原因を考える	1.62(0.80)	2.10(1.11)
g. 誤解されるような無意味な yes を連発しない	2.04(0.66)	2.26(0.73)
(2) 手助けして欲しい事があって、人に頼み事をするとき		
a. 具体的で明確な事柄について手助けを頼む	2.77(0.71)	2.61(0.72)
b. 態度で匂わさずに言葉にだした形で頼む	3.04(0.82)	2.84(0.86)
c. 自分の問題を察してもらいより、自分から言い出す	2.96(0.72)	2.81(0.91)
d. 自分の理由を説明する	3.00(0.63)	2.90(0.87)
e. チャーミングな態度で頼む	2.04(0.77)	<u>1.87(0.76)</u>
f. だめそうでももうひと押しする	2.15(0.92)	2.03(0.80)
g. あきらめないで繰り返して頼む	<u>1.77(0.59)</u>	2.06(0.85)
h. 無理な依頼をされた時には no をいう	2.85(0.92)	2.87(0.88)
(3) 交渉や話し合いをしなければならぬとき		
a. 自分の立場や考えを明確に説明する	2.73(0.87)	2.68(0.79)
b. 自分の側の理由をたくさんあげる	2.42(0.90)	2.42(0.85)
c. 相手に対して交換条件を示す	<u>1.69(0.88)</u>	<u>1.58(0.62)</u>
d. 相手の発言を受けた言い回しをする (その点は正しいが、この可能性もあるなど)	2.08(0.80)	2.61(0.95)
e. だめでも要求を少し変えてまた押ししてみる	<u>1.96(0.87)</u>	2.10(0.91)
f. 口調やアクセント、言い回しを工夫して no を言う	2.35(0.89)	2.23(0.92)
(4) 人と会話を始めるとき		
a. 目を合わせる	3.69(0.55)	3.77(0.50)
b. にっこり笑う	3.54(0.71)	3.81(0.41)
c. ハロー、ハイなどという	3.81(0.40)	3.87(0.43)
d. 相手について何か訪ねる	3.31(0.84)	3.58(0.62)
e. 何か自分の出来事を話す	2.96(0.87)	3.10(0.75)
f. ちょっとした話題でおしゃべりをする	3.23(0.71)	3.42(0.67)
g. 忙しいとき話をあとにしてくれるように言う	<u>1.50(0.65)</u>	<u>1.94(0.77)</u>
(5) 友達をつくらうと思ったとき		
a. 挨拶をしあう関係になる	3.62(0.57)	3.74(0.51)
b. おしゃべりをする関係になる	3.31(0.74)	3.48(0.57)
c. 用事やおしゃべりのために電話をする	<u>1.35(0.63)</u>	<u>1.55(0.81)</u>
d. コーヒーに誘う	<u>1.23(0.65)</u>	<u>1.61(0.84)</u>
e. 誘って一緒にどこかに出かける	<u>1.46(0.81)</u>	<u>1.68(0.70)</u>
f. 日時を決めた約束は前もって電話で確認をとる	<u>1.07(0.27)</u>	<u>1.29(0.59)</u>
(6) 異性の友人をつくるには		
a. 相手に関心がある態度を示す (目を合わせる、ほほえむ、挨拶するなど)	2.73(1.00)	2.81(1.05)
b. おしゃべりをする関係になる	2.73(0.92)	2.97(0.87)
c. 連絡先を教えあう	2.19(1.20)	<u>1.87(0.99)</u>
d. コーヒーに誘う	<u>1.23(0.65)</u>	<u>1.32(0.60)</u>
e. 昼食に誘う	<u>1.35(0.75)</u>	<u>1.35(0.61)</u>
f. 夕食に誘う	<u>1.35(0.75)</u>	<u>1.19(0.48)</u>
g. どこかに出かけてデートする	<u>1.12(0.33)</u>	<u>1.16(0.52)</u>
h. 行きすぎた行動にはノーという	<u>1.58(0.99)</u>	<u>1.65(0.95)</u>
i. 相手のアプローチを親しみを込めてからかう	<u>1.38(0.70)</u>	<u>1.81(0.98)</u>
j. その気のなくなった関係は断る	<u>1.54(0.99)</u>	<u>1.61(0.92)</u>

表3 ソーシャル・スキルの実施度 (続き)

スキル項目	米国行き M(SD)	英国行き M(SD)
(7) パーティーで楽しむとき		
a. 簡単な自己紹介をして挨拶する	3.23(0.86)	2.81(0.91)
b. 何か質問して話のきっかけをつくる	3.23(0.91)	3.26(0.68)
c. 話題を提供する	2.81(0.94)	2.74(0.82)
d. 楽しい冗談を言う	2.23(0.82)	2.35(0.95)
e. 面白くない時に話題を転換する	2.31(0.84)	2.19(0.87)
f. 知人をほかの人に紹介する	2.12(0.91)	2.74(0.93)
g. 後でホストにお礼を言う	3.04(1.11)	2.35(1.23)
h. ちょっとしたパーティーを企画する	<u>1.35(0.69)</u>	<u>1.42(0.85)</u>
(8) スピーチをする必要のあるとき		
a. 自分について細かい情報を与える	2.08(0.80)	2.32(0.94)
b. 具体例を出して話す	2.54(0.86)	2.32(0.87)
c. 自分の体験談をまぜて話す	2.35(0.98)	2.16(0.86)
d. 自分の意見や感想を言う	2.85(0.88)	2.77(0.92)
e. 話のスパイスとしてジョークをいう	<u>1.85(0.88)</u>	<u>1.90(0.79)</u>
f. 表情を豊かにしてしゃべる	<u>2.65(1.06)</u>	2.42(0.92)
(9) 各種の冗談をいうこと		
a. 冗談をまぜた返事をする	2.58(0.95)	2.77(0.88)
b. 冗談混じりに聞いてみる	2.69(1.05)	2.65(0.95)
c. 皮肉な意地悪な感じの冗談を言う	<u>1.58(0.86)</u>	<u>1.52(0.85)</u>
d. バカげた非現実的な冗談を言う	<u>1.50(0.76)</u>	<u>1.52(0.85)</u>
e. セクシーな冗談を言う	<u>1.35(0.56)</u>	<u>1.58(0.76)</u>
(10) 感情の共有をするとき		
a. 親しい友人と同情的に悲しい感情を共有する	2.12(0.99)	2.77(1.02)
b. 目上の人やよく知らない人の感情には踏み込まない	2.23(0.99)	2.35(0.88)
c. 冗談で悲しみを紛らわす	<u>1.58(0.58)</u>	<u>1.94(0.89)</u>
(11) 失敗したとき		
a. 回復のために話し合いの機会をつくる	<u>1.92(1.09)</u>	2.19(0.98)
b. 事情をよく説明する	2.58(1.14)	2.58(0.89)
c. 代替案や解決策を提案する	2.04(1.04)	2.00(0.82)
d. 埋め合わせのチャンスをくれるよう頼む	2.00(0.98)	2.06(0.89)
e. 埋め合わせになる行動をする	2.00(0.89)	2.45(0.99)
f. 次回は改善してみせる	2.35(1.06)	2.52(0.93)
g. 相手に対して不満をいう	<u>1.69(1.93)</u>	<u>1.45(0.68)</u>
h. 法的なトラブルは専門家の所に行く	<u>1.31(0.79)</u>	<u>1.13(0.43)</u>
(12) 公平なつきあいをすること		
a. 自分にできる事を工夫して役に立つ	2.77(0.91)	2.90(0.87)
b. 互いの負担やエネルギーが等しくなるよう調整する	2.77(1.03)	2.65(0.88)
c. 食い違いを感じたときには口に出して話し合う	2.69(1.01)	2.61(0.76)
(13) 学校で積極的に学ぶこと		
a. 授業中に質問する	2.73(1.87)	2.74(0.93)
b. 授業後質問に行く	2.58(0.81)	2.55(0.85)
c. 教師に授業の工夫や変更などを要求する	<u>1.54(0.71)</u>	<u>1.87(0.92)</u>
d. 学校のオフィスに配慮やアレンジを要求する	<u>1.31(0.55)</u>	<u>1.58(0.62)</u>
f. 自分の困難を説明し、アドバイスをもらう	2.31(0.97)	2.71(0.94)
g. 自分の意見を積極的に言う	2.69(0.88)	2.48(0.89)

注) 評定は、まったくしなかった=1, あまりしなかった=2, ときどきした=3, よくした=4
の4段階。数値は評定の平均値, () 内は SD。太線は3.00以上, 下線は2.00未満のもの。

表4 スキルの実施度と個人変数との相関
(米国行き)

スキルの領域	米国への 関心度	米国への 知識度	英語力
ハンディ	.10	.35 ⁺	-.06
頼み事	.37 ⁺	.48*	.48*
交渉	-.14	-.01	.10
会話	.28	.38 ⁺	.35 ⁺
友達	.12	.08	.07
異性	-.09	.21	.02
パーティー	-.01	.04	.31
スピーチ	.45*	.22	-.08
冗談	.41*	.44*	-.02
感情	.33	.29	.04
失敗	-.17	.07	.36 ⁺
つきあい	.11	.22	.27
学習	.55*	.53*	.32
全体	.23	.30	.29

注) * p<.05, + p<.10

表5 スキルの実施度と個人変数との相関
(英国行き)

スキルの領域	英国への 関心度	英国への 知識度	英語力
ハンディ	-.16	-.07	-.49*
頼み事	.14	.35 ⁺	.10
交渉	.39*	.45*	.32 ⁺
会話	.46*	.32 ⁺	.30
友達	.36*	.12	.20
異性	.15	.28	.16
パーティー	.50*	.27	.26
スピーチ	.18	-.14	.20
冗談	.13	.14	.39*
感情	.22	.07	.27
失敗	.12	.21	.16
つきあい	.46*	.20	.30 ⁺
学習	.31 ⁺	.31 ⁺	.29
全体	.41*	.35 ⁺	.31 ⁺

注) * p<.05, + p<.10

も示された。

なお、研修後に測定した健康状態の各項目の合計得点とスキル全体の実施度との間の相関係数も行き先別にそれぞれ算出したが、これらの間に有意な相関関係は見いだせなかった。

3. 相手国人と日本人のイメージ変化

(1) 全体的にみた研修前後のイメージの変化

研修前後の相手国人と日本人のイメージの変化について検討した。イメージの各項目について研修前後別に平均評定値を求め、それらを図示したものが図1～図4である。研修前後のイメージの差を検討するために、これらの平均評定値に基づきt検定を行ったところ次のような結果を得た。まず米国行きでは、研修前後で、アメリカ人のイメージは、より忠実な、酒好きでない、侵略的でないという方向へ変化し(図1)、日本人はより忠実でない、スポーツマン的な、勇敢な方向へと変化した(図2)。一方、英国行きでは、イギリス人のイメージは、より合理的な、陽気な、開放的な、酒好きな、権威的でない、官僚的でない、個人主義的な方向へと変化し(図3)、日本人のイメージは、よりタフではない、侵略的ではない方向へと変化した(図4)。

(2) スキルの実施度と研修前後のイメージの変化

スキルの実施度と研修前後のイメージの変化との関係を検討するために、[研修後の評定値－研修前の評定値]の計算にしたがって各イメージ項目ごとにイメージ変化量を算出し、行き先別(米国・英国)および評定対象別(相手国人・日本人)にスキルの実施度(全体および領域別)とイメージ変化量との相関係数を算出した。

表6は、米国へ行った対象者のスキルの実施度とアメリカ人に対するイメージ変化量との相関関係をまとめたものである。この表からイメージの変化に多く影響を及ぼしていたのは、頼み事に関するスキル・スピーチに関するスキル・公平なつきあいに関するスキルであることがわかる。一方、表7は、米国へ行った対象者のスキルの実施度と日本人に対するイメージ変化

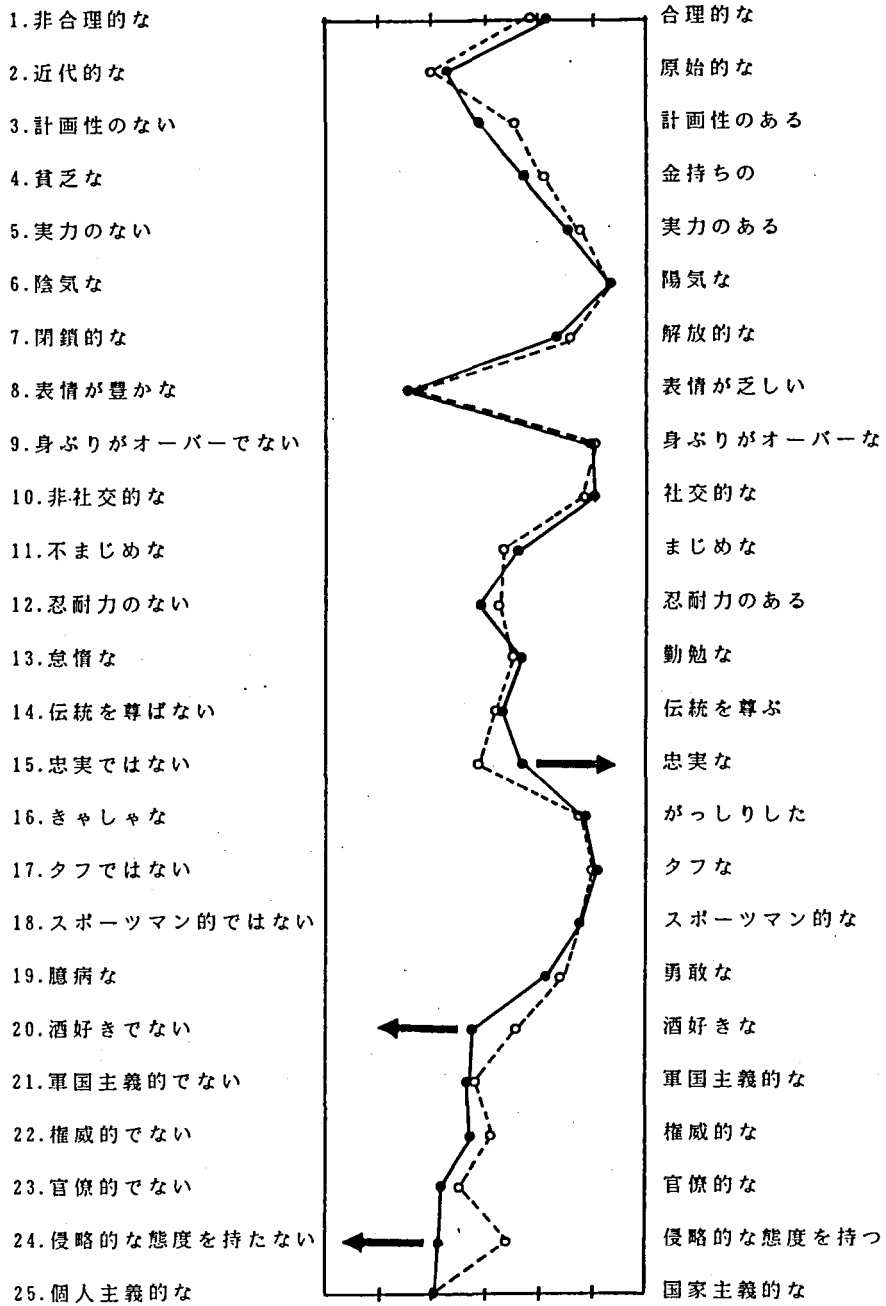


図1 アメリカ人に対するイメージ (米国行き)
 ---○--- 研修前 —●— 研修後 → 有意な変化

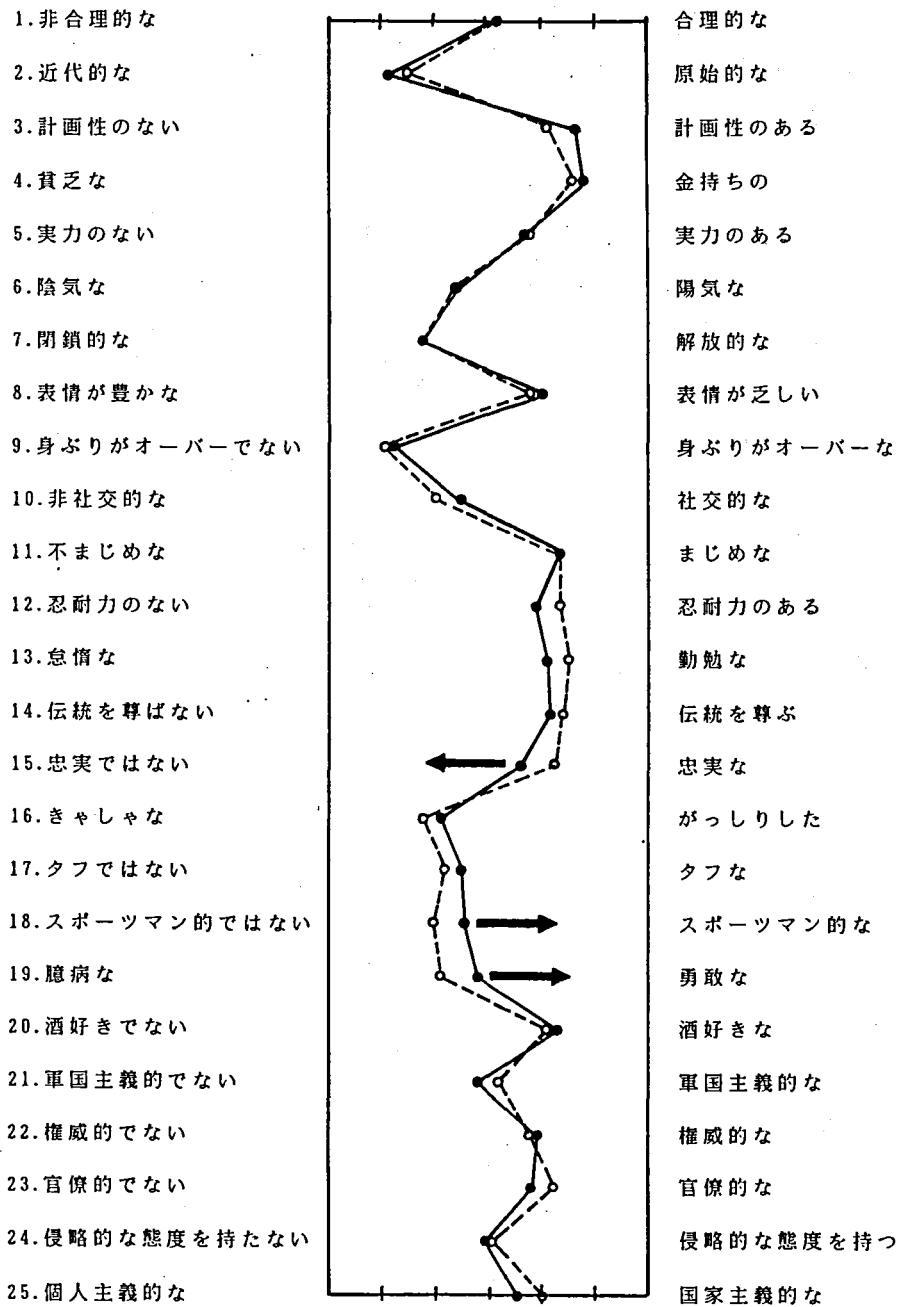


図2 日本人に対するイメージ (米国行き)

---○--- 研修前 —●— 研修後 → 有意味な変化

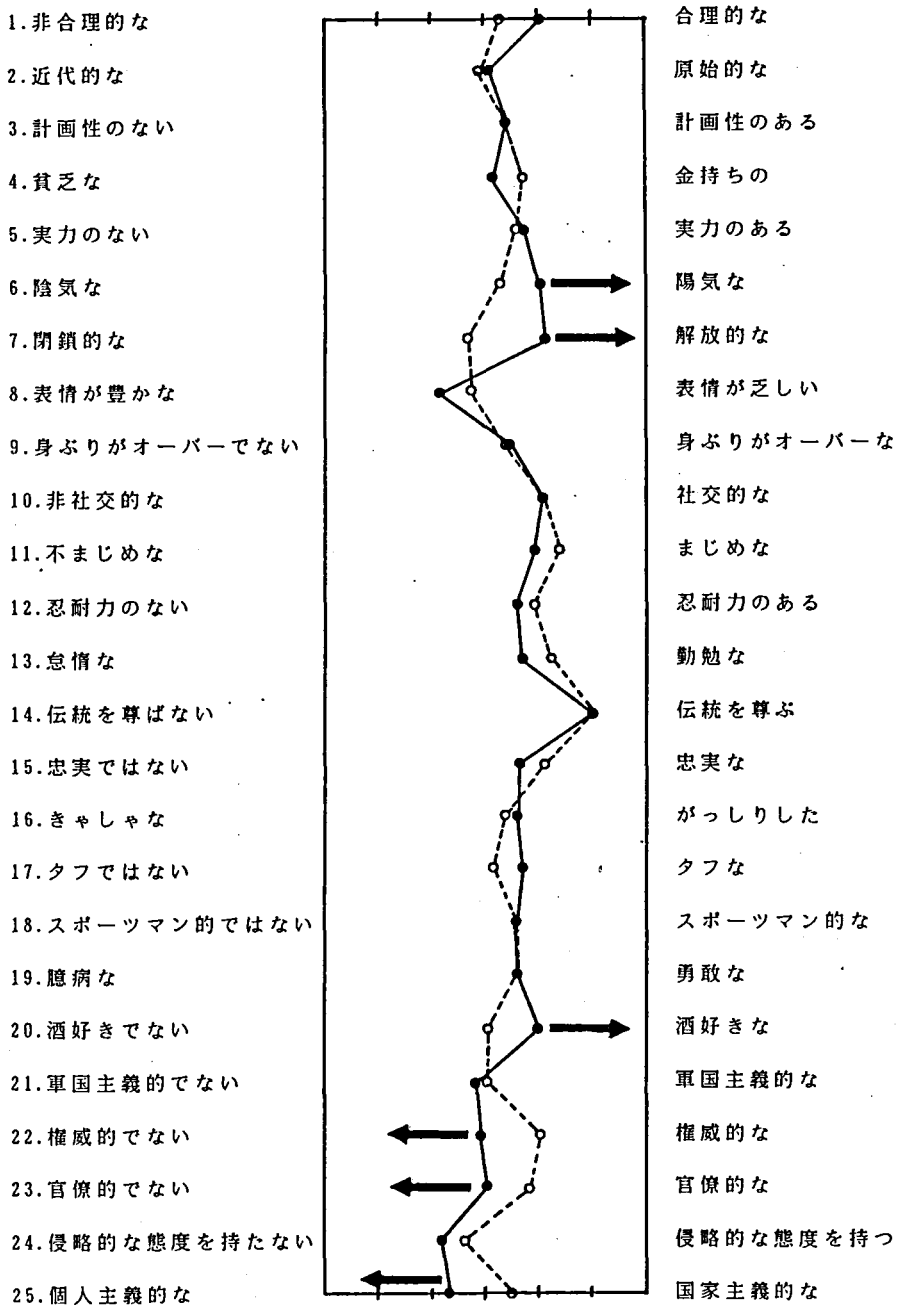


図3 イギリス人に対するイメージ (英国行き)
 ---○--- 研修前 —●— 研修後 → 有意な変化

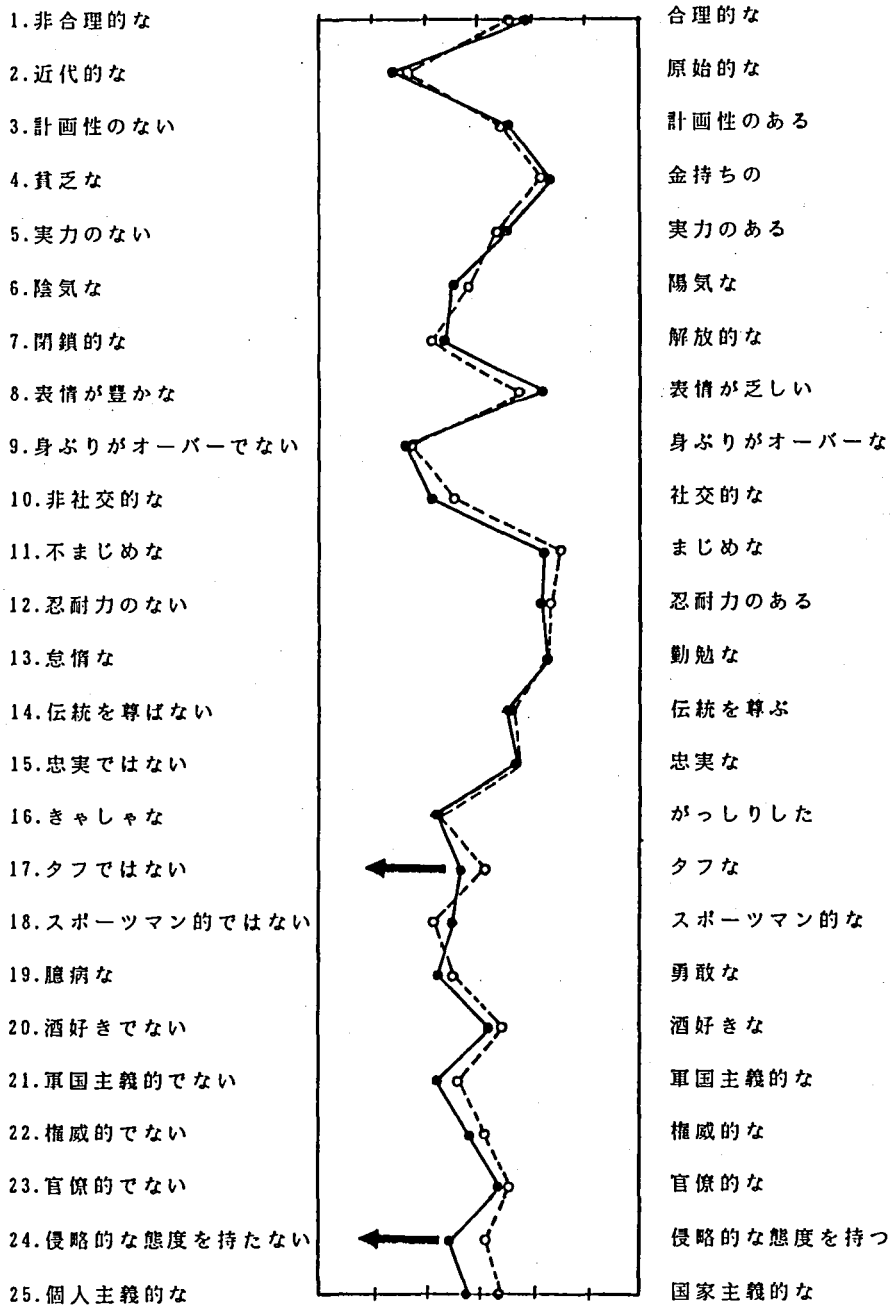


図4 日本人に対するイメージ (英国行き)

---○--- 研修前 ●— 研修後 → 有意な変化

量との相関関係をまとめたものであるが、日本人のイメージ変化に多く影響していたのは、言葉のハンディの克服に関するスキル・異性に関するスキルであるといえる。

また表8は、英国へ行った対象者のスキルの実施度とイギリス人に対するイメージ変化量との相関関係をまとめたものである。この表からイメージの変化に多く影響を及ぼしていたのは、交渉に関するスキル・友達に関するスキル・異性に関するスキル・パーティーに関するスキ

表6 スキルの実施度とアメリカ人に対するイメージ変化との関係 (米国行き)

	領域別スキル														
	ハン ディ	頼 み 事	交 渉	会 話	友 達	異 性	パ ー テ ー	ス ピ ー チ	冗 談	感 情	失 敗		つ き あ い	学 習	全 体
非合理的な 近代的な 計画性のない 貧乏な 実力のない			←											→	合理的な 原始的な 計画性のある 金持ちの 実力のある
陰気な 閉鎖的な 表情が豊かな 身ぶりがオーバーでない 非社交的な		←		←									←		陽気な 解放的な 表情が乏しい 身ぶりがオーバーな 社交的な
不まじめな 忍耐力のない 怠惰な 伝統を尊ばない 忠実ではない								→	→						まじめな 忍耐力のある 勤勉な 伝統を尊ぶ 忠実な
きゃしゃな タフではない スポーツマン的ではない 臆病な 酒好きでない															がっしりした タフな スポーツマン的な 勇敢な 酒好き
軍国主義的でない 権威的でない 官僚的でない 侵略的な態度を持たない 個人主義的な										→					軍国主義的な 権威的な 官僚的な 侵略的な態度を持つ 国家主義的な

注) ・統計的に意味のある相関関係がみられた箇所に矢印が記載されている (→ p.05, → p<.10)。
 ・矢印の向きは、スキルの実施度が高いときにみられるイメージの変化方向を示す。

表7 スキルの実施度と日本人に対するイメージ変化との関係 (米国行き)

	領域別スキル														
	ハン ディ	頼 み 事	交 渉	会 話	友 達	異 性	パ ー テ ー	ス ピ ー チ	冗 談	感 情	失 敗		つ き あ い	学 習	全 体
非合理的な 近代的な 計画性のない 貧乏な 実力のない														→	合理的な 原始的な 計画性のある 金持ちの 実力のある
陰気な 閉鎖的な 表情が豊かな 身ぶりがオーバーでない 非社交的な		←													陽気な 解放的な 表情が乏しい 身ぶりがオーバーな 社交的な
不まじめな 忍耐力のない 怠惰な 伝統を尊ばない 忠実ではない															まじめな 忍耐力のある 勤勉な 伝統を尊ぶ 忠実な
きゃしゃな タフではない スポーツマン的ではない 臆病な 酒好きでない															がっしりした タフな スポーツマン的な 勇敢な 酒好き
軍国主義的でない 権威的でない 官僚的でない 侵略的な態度を持たない 個人主義的な															軍国主義的な 権威的な 官僚的な 侵略的な態度を持つ 国家主義的な

注) ・統計的に意味のある相関関係がみられた箇所に矢印が記載されている (→ p.05, → p<.10)。
 ・矢印の向きは、スキルの実施度が高いときにみられるイメージの変化方向を示す。

表8 スキルの実施度とイギリス人に対するイメージ変化との関係 (英国行き)

	領域別スキル														
	ハン ディ	頼 み 事	交 渉	会 話	友 達	異 性	パ ー ティ	ス ピー チ	冗 談	感 情	失 敗		つ き あ い	学 習	全 体
非合理的な 近代的な 計画性のない 貧乏な 実力のない					→			←	←						合理的な 原始的な 計画性のある 金持ちの 実力のある
陰気な 閉鎖的な 表情が豊かな 身ぶりがオーバーでない 非社交的な	→				→	→			→		→			→	陽気な 解放的な 表情が乏しい 身ぶりがオーバーな 社交的な
不まじめな 忍耐力のない 怠惰な 伝統を尊ばない 忠実ではない			→	→	→	→	→	→	→			→	→	→	まじめな 忍耐力のある 勤勉な 伝統を尊ぶ 忠実な
しゃしゃない タフではない スポーツマン的ではない 臆病な 酒好きでない						→	→	→							がっしりした タフな スポーツマン的な 勇敢な 酒好き
軍国主義的でない 権威的でない 官僚的でない 侵略的な態度を持たない 個人主義的な	→		←		←	←	←	←	←	←	←	←	←	←	軍国主義的な 権威的な 官僚的な 侵略的な態度を持つ 国家主義的な

注) ・統計的に意味のある相関関係がみられた箇所に矢印が記載されている (→ p.05, → p<.10)。
 ・矢印の向きは、スキルの実施度が高いときにみられるイメージの変化方向を示す。

表9 スキルの実施度と日本人に対するイメージ変化との関係 (英国行き)

	領域別スキル														
	ハン ディ	頼 み 事	交 渉	会 話	友 達	異 性	パ ー ティ	ス ピー チ	冗 談	感 情	失 敗		つ き あ い	学 習	全 体
非合理的な 近代的な 計画性のない 貧乏な 実力のない			←				←	←	←	←	→	→	←	←	合理的な 原始的な 計画性のある 金持ちの 実力のある
陰気な 閉鎖的な 表情が豊かな 身ぶりがオーバーでない 非社交的な								←					←		陽気な 解放的な 表情が乏しい 身ぶりがオーバーな 社交的な
不まじめな 忍耐力のない 怠惰な 伝統を尊ばない 忠実ではない		←			→	→	→	→	→			→	→	→	まじめな 忍耐力のある 勤勉な 伝統を尊ぶ 忠実な
しゃしゃない タフではない スポーツマン的ではない 臆病な 酒好きでない	←		→	→		→	→	→			←			→	がっしりした タフな スポーツマン的な 勇敢な 酒好き
軍国主義的でない 権威的でない 官僚的でない 侵略的な態度を持たない 個人主義的な			→	→							→	→	→	→	軍国主義的な 権威的な 官僚的な 侵略的な態度を持つ 国家主義的な

注) ・統計的に意味のある相関関係がみられた箇所に矢印が記載されている (→ p.05, → p<.10)。
 ・矢印の向きは、スキルの実施度が高いときにみられるイメージの変化方向を示す。

ル・冗談に関するスキルであることがわかる。一方、表9は、英国へ行った対象者のスキルの実施度と日本人に対するイメージ変化量との相関関係をまとめたものであるが、日本人のイメージ変化に多く影響していたのは、パーティーに関するスキル・冗談に関するスキルなどであるといえる。

考 察

今回は、①スキル目録の実施度を評定し、②スキル実施を規定する要因について検討し、③スキルのイメージ変化への影響を調べた。

比較的实施されやすかったスキルには、目を合わせたり声をかけたりといった、積極的に対人接触を求めるためのスキルが目立つ。直接の対人接触を通じて語学練習をすることがプログラムの目的の一つとすれば、それになかった行動といえる。また繰り返しや言葉の説明を頼むなどの、援助を求める際の依頼のためのスキルも、比較的实施されている。これはホストファミリーに庇護され親切にされる日本人学生の役割と合致して、出てきやすいのかもしれない。

反対に、実施されにくかったスキルには、不満をいう、交渉するなどの主張的な行動に関するものが多い。明確な自己主張と交渉のためのスキルは、欧米社会では重要でありながらも日本社会では抑制されがちなスキルであり、海外へ行く場合に課題となるスキルの一つといえよう。冗談を用いたスキルの実施度の低さは、外国語で冗談をやりとりする場合の語学面のハンディーを反映しているのかもしれない。異性関係のスキルの実施度の低さについては、積極的なカップル社会で期待される行動が、日本という同性交友社会の行動レパートリーに一致しないか、あるいはプログラム中に実際にそうした機会を持ちにくかったかであろう。

今回比較的良好に実施された、対人関係の開始や依頼などのスキルは、異文化への移行の初期に特に必要なものと考えられる。あるいは日本人の行動レパートリーにもとよりよく含まれ、実施しやすい行動なのかもしれない。それに対して交渉・主張などの問題解決に関するスキル、冗談の活用や積極的な異性関係に関するスキルは、日本人の行動レパートリーに希薄なため、日本人にとって苦手なスキルとなっている可能性がある。しかしこれらも滞在が長期にわたった場合には、必要になるスキルかもしれない。今後は渡航前のスキル実施状況との比較が望まれる。なお今回は行き先が同じ西欧文化圏でということもあり、実施度の高かった項目や低かった項目に米国と英国の間で大きな違いはみられなかった。

スキルの実施と個人の要因との間の関係では、英語力に関しては、スキル実施の基本的な能力の一つではあっても同一ではなく、言語的な能力と行動面の能力が異なるものであることを示している。言語を学習することと行動を学習することは同じではなく、言語学習でスキルが自動的に発揮されるものではないとすれば、異文化における適応を左右するスキルについては、効果的な教育方法が検討されなければなるまい。関心、知識の高さは、いくつかのスキルの高さとポジティブに結びついており、認知的な体制化を促進してスキル習得に効果的に働いていると思われる。

今回の海外滞在体験によるイメージの変化に関しては、相手国の人のイメージは肯定的に変化し、日本人のイメージは肯定的・否定的方向に変化した。英国の場合、閉鎖的、権威的、官僚的、国家主義的などのイメージが薄れており、滞在前の先入観的なイメージが直接の対人接触によって修正されたと思われる。アメリカ人の場合は、酒好きや侵略的などのイメージが修正されているが、変化したイメージはイギリス人の場合ほど多くない。日本には米国に関する情報量がもとより多く、実際とのギャップの少ないイメージをすでに持っているのかもしれない。

い。Kelman (1965) は、異文化接触は、国際関係の出来事に対する態度、国家的、国際的な忠誠心、他国民のイメージを変容しようというモデルを提起している。欧米への旅行前後で相手国の国家のイメージのポジティブな変化を報告したものとして、山本 (1985) の研究があげられる。そこでは、米国の国家イメージが、興奮から沈静へと変化している。北川と箕浦 (1990) は、米国へ研修旅行に行った高校生の、アメリカ人 (白人) へのイメージの変化を報告しているが、そこではより好き、親しみやすい、ホットな、ユーモラスな、深みがあるなど、情緒的レベルを中心に好転がみられる。彼らは、その変化に道徳的判断と共通する葛藤解決的な認知過程が関与していると考え、その判断レベルを測定している。一方我々は、スキル発揮に基づく対人的な接触の量や成否が対人的な印象の形成に関与すると考えるため、イメージの変化にオバードな行動の発現がどのように関わるかを検討している。

スキルの領域別の実施得点とイメージ変化の大きさとの関連では、特定のスキルの実施が特定のイメージの変化に関与するといった個別的な対応関係がみられる。比較的多くのイメージとつながりがあるのは、米国行きでは、つきあい、スピーチ、頼みごとなど、自分を理解してもらい関係を深めるようなスキルであり、英国行きでは、冗談、友達づくり、パーティーなどの楽しい関係づくりのためのスキルであった。これらを発揮して関係性が深まることで、渡航前に持っていた相手への先入観的イメージが修正されていくものと思われる。

日本人のイメージについては、たくましさに関係したイメージなどが、英米とも肯定的な方向へ変化している。これまで自国への評価に関しては、海外旅行で高まる傾向があると報告されている (山口ら, 1971, 津留, 1973, 田中ら, 1975)。しかし北川ら (1991) は、アメリカ研修に参加した高校生は、日本人のイメージを、より親しみにくい、ルーズなどの否定的な方向へ変化させたと報告している。今回の日本人に対するイメージも、英国行きで権威的ななど、否定的な方向に変化したものがある。各領域のスキルとの関連でみると、例えばハンディ克服スキルの高い実施状況が、否定的な方向の日本人イメージ変化と結びついている。日本人へのイメージの変化が何に導かれるものであるのか、今回の結果からは特定しえないが、出会った外国人との比較、あるいは日本人としての自分の存在感などによって、変容してくるのかもしれない。滞在先での体験により肯定的にも否定的にも変わりうるとすれば、体験の意味づけの仕方、あるいはパーソナリティ特性などの観点からより検討する必要がある。

今後の課題としては、イメージ変化をより反映し得る形容詞や重要なスキルを選択したうえで、イメージ変化を媒介するものとしてソーシャル・サポート・ネットワークなどを測定し、スキルの機能に関するモデルを構築し、検討する必要がある。

本研究の一部は、松下国際財団1991年度研究助成 (代表者・藤原武弘) の援助を得て実施された。

引用文献

- Furnham, A. 1984 Tourism and culture shock. *Annals of Tourism Research*, 11, 41-57.
Furnham, A. & Bochner, S. 1986 *Culture shock*. New York: Methuen
原 裕見・稲田素子 1991 国際的行動能力と日本人の特徴 中西晃 (編) 国際的資質とその形成 多賀出版
Kelman, H. C. 1965 *International behavior: a social psychological analysis*. New York: Olt Rainhart & Wilson
Kim, Y. 1986 *Cross-cultural Adaptation*. New York: Sage

- 北川歳昭・箕浦康子 1990 高校生の海外ホームステイ効果 (I)——アメリカ人と日本人のイメージの変化—— 日本社会心理学第30回大会発表論文集 362-363.
- 北川歳昭・箕浦康子 1991 高校生の海外ホームステイ効果 (III)——態度・認識における変化—— 日本社会心理学会第31回大会発表論文集 34-35.
- Oberg, K. 1960 Culture shock: Adjustment to new cultural environment. *Practical Anthology*, 7, 179-182.
- Pearce, P. L. 1981 Environmental shock: a study of tourists' reactions to tropical islands. *Journal of Applied Social Psychology*, 11, 268-280.
- Pearce, P. L. 1982 Tourists and their hosts: some social and psychological effects on inter-cultural contact. In S. Bochner (Ed.), *Cultures in contact: studies on cross-cultural interaction*. Oxford: Pergamon
- Steinkalt, E. & Taft, R. 1979 The effect of a planned intercultural experience on the attitudes and behaviour of the participants. *International Journal of Intercultural Relations*, 3, 187-198.
- 田中国夫・虎田俊彦・小林昭司 1972 旅行による「国家に対する態度」の変容について 関西学院大学社会学部紀要 25, 11-21.
- 田中共子 1991 日本人学生のためのアメリカン・ソーシャル・スキル・トレーニング 広島大学留学生センター紀要 2 (印刷中)
- 津留 宏 1973 海外旅行体験による青年の意識変容について 神戸大学教育学部研究集録, 50, 1-11.
- 山口茂嘉・藤原武弘 1971 外国旅行が国家認知に及ぼす影響について (2)——1ヶ月のアメリカ旅行の場合 中四国心理学会論文集 4, 130.
- 山本多喜司 1985 異文化環境への適応に関する環境心理学的研究 昭和60年度科学研究費補助金研究成果報告書
- 吉田寿夫 1981 外国人に対する認知の次元と規定因に関する研究 心理学研究 52, 177-181.